

短期大学におけるブライダル教育の学びの考察

－ PBL を適用した実践型教育の報告 3 －

小 山 理 子

A Consideration of a Bridal Education in a College － The Third Report of a Study of a Practical Class Applied PBL Theory for a Bridal Field －

Ayako KOYAMA

I はじめに

筆者は、第1報（小山, 2012）および第2報（小山, 2013）において、短期大学におけるブライダル教育において、PBL（Project-based learning）を適用した実践型教育の在り方を考察した。第1報では、ブライダル業界への就職を希望する学生が、社会で求められているスキルや能力を習得するためには、専門知識の教授や学内での演習形式の教育にとどまらず、現場での実際の課題や問題を想定し、接客能力、問題発見・課題解決能力などを身に付けさせる全人的教育が重要であることを指摘し、PBLを適用した新たな教育手法の提案を行った。さらに、第2報においては、ブライダル教育におけるPBL型授業の目的を、より高度な専門知識の修得ではなく、人間力や職業意識の向上とし、実在する人物をモデルにした本物の挙式の開催をテーマに、PBL型の授業実践を行った。そして、学習者による自己評価アンケートならびに学習者の意識変化から考察を行い、ブライダル教育としての効果を検証した。しかしながら、学生の授業への参加意識、学習態度の改善は確認できたものの、学生の学習成果がどのように変化したかを確認することまではできていない。本報告では、前稿までの論考を踏まえ、PBL型授業の導入の意義や目的を再確認した上で、PBL型授業での学生の学習成果に注目し、学びの分析を試みた。

II 研究の背景と問題意識

高等教育の質保証が問題とされる中で、教育としては、分析的推論、問題解決、コミュニケーション、チームワークなどの社会で通用するような汎用的技能の育成が注目されている。このような能力は、「学士力¹⁾」「社会人基礎力²⁾」「就業力³⁾」などにおいて提唱されている能力であり、現代社会を生き抜くために必要な「新しい能力」概念（松下, 2010; 2014）である。このような「新しい能力」の育成の手法として注目されているのが、アクティブラーニングである。アクティブラーニングを取り入れた授業は、「知識と技能・態度との連動が重要であり、日常的になじみのある知識ではなく、学習しないと手に入られない非日常的な知識を獲得し、それを活用する汎用的技能を身につける」（溝上, 2011）可能性も高いという特徴を有するためである。ここで、アクティブラーニングの定義を再確認しておく、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」（中央教育審議会, 2012）のことであり、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も含まれる。

平成24年度の中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会, 2012)において、アクティブラーニング

(能動的学修)をキーワードとした大学教育の質的転換が提唱されて以来、実践面での導入も加速している。全国の大学のさまざまな学科(資格取得を目的とした学部を除く、ほぼすべての系統のうち多くの大学に設置されている学科)におけるカリキュラムを対象とした全国調査(河合塾, 2011; 2013)では、アクティブラーニングの要素を含む実践の導入がある程度進んできていることを明らかにしている。PBL (Problem-Based Learning または Project-Based Learning) もアクティブラーニングの一形態であるが、PBLを導入している大学は全国的に見てまだ少ない(河合塾, 2012)。一方で、組織的にPBLを導入している大学では、PBL型授業の成果発表会を開催し情報共有を行ったり、授業設計手法やティップスなどをまとめたりと、導入促進のための取り組みも活発である。例えば、三重大学は、PBL型授業の成立の要件を3つにまとめ(表1)、現段階におけるPBL枠組みとして提示されている類型として、4つのタイプのPBL(表2)を示している(三重大学高等教育創造開発センター, 2011)。茨城大学では、PBLをまず、①専門教育におけるPBL、②教養教育におけるPBL、③プロジェクト実施型PBLと、カリキュラム上の科目の枠組みから見た分類に区分した上で、実際に授業とする場合の授業内容に応じて表3のように5つに分けている(茨城大学大学教育センター, 2013)。広島大学では、PBLガイドブックやハンドブックを作成し、PBLの運用方法やPBL実施手順などを紹介し、PBL導入の支援を実施しPBL型授業を推進しているだけでなく、能動的学修を支援するための授業を実践する際に必要となる教員の視点に立った手引きだけでなく、能動的学修の主体である学生の視点に立ったガイドブックも用意されている(広島大学人材育成推進室, 2012)。

表1 三重大学のPBL型授業の成立の要件

①問題との出会い、解決すべき課題の発見、学習による知識の獲得、討論を通じた思考の深化、問題解決という学習過程を経る学習を行う (問題基盤性)
②学習は、学生による自己決定的で能動的な学習により進行する (学習自己決定性)
③学生による自己省察を促し、能動的な学習の過程と結果を把握する評価方法を使用する

表2 三重大学のPBLの分類

① 問題提示型 PBL
② 問題自己設定型 PBL
③ プロジェクト型 PBL
④ 実地体験型 PBL

表3 茨城大学のPBLの分類

① 問題提起型 PBL	教養教育における PBL が対応
② 企画遂行型 PBL	プロジェクト実施型 PBL が対応
③ 地域参画型 PBL	専門教育における PBL が対応
④ 産学連携型 PBL	専門教育、教養教育双方の PBL に対応
⑤ 正課外活動型 PBL	プロジェクト実施型 PBL に対応

また、PBL型授業の実践からは、授業を成功させるポイントなどの知見も提示されつつある。中山(2013)は、PBL教育を導入させるポイントとして次の3点にまとめている。1点目が、問題や課題を扱うという点だけでなく、解決までの道りを予調整備しながら授業設計を行うこと、2点目が、学生のレディネスを把握すること、3点目が、授業全体、全ての学習内容を無理にPBL形式で行おうとは考えないことである。また、中尾ら(2014)は、教育の際に工夫していた点として、次の3点を挙げている。1点目が、指示、指導をせず、支援に徹すること、2点目が、学生が自ら意思決定するような、促しを与えること、3点目が、活動に意図をもつよう、意識づけることである。著者も、PBL型授業の実践を通じて、学生の意識変容の視点から、PBLの授業を成功に導くためのキーワードとして、「信頼」「責任」「参加」「振り返り」「再挑戦」を指摘した(小山, 2014)。このように、PBL型授業のノウハウも蓄積されつつあり、実践に向けての環境は整いつつある。

上述の項目は全て、広義では学生の能動的学修を支援する授業から得られたものであり、PBL以外の手法のアクティブラーニングの実践にも有効であり、アクティブラーニングの導入をさらに促進する効果があると言える。しかしながら、アクティブラーニング型授業の先駆的な実践や先行研究での事例のほとんどが四年制大学・大学院での事例あり、短期大学での事例は少ない。さらに、アクティブラーニング導入による授業の効果や学生の変容についての実証的な研究も少ない。例えば、教養ゼミにおいてPBL型授業を実施した事例では、学生授業評価アンケートの結果から、PBL型導入学部が非導入学部の学生より「多面的視

点」と「課題発見」の能力の向上が高いことが明らかになった(吉田ら, 2013)など、アクティブラーニングを導入した授業実践の成果は報告されているが、個人の学生がどのように学んだかという学びの特徴や学びの授業効果の測定方法は、授業アンケートによる学生個人の評価にとどまっている。「深い学び」それ自体は数量化して評価することが不可能であり、可能であったとしても極めて困難である(河合塾, 2013)という問題もその要因ではあるが、アクティブラーニング導入の背後にある文脈が意味する通り、PBL型授業は導入することが目的ではなく、学生の能動的学修を促すことが目的であるため、学生の学びの特徴や変容を明らかにしていく必要がある。

そこで、本報告では、PBL型授業における学びを調査対象とし、学生のレポート課題と授業の感想から計量テキスト分析の手法により、学生の学びにどのような特徴があるのかを可視化し、解析することを試みた。計量テキスト分析の活用は社会調査アンケートの自由記述の分析などのテキスト情報を言語解析することにより、何らかの法則性や統計的な特徴を見つけ、分類するなどし、一見して見出せない情報から、何らかの意味づけのできる情報を見出すために用いられている。

Ⅲ 方法

著者がPBL型の実践を行い、学生の課題レポートや授業を履修した感想をテキストデータにまとめ、計量テキスト分析を行う。授業概要および分析方法の詳細を以下に示す。

1. 授業概要

京都の老舗ホテルとの産学連携により、ウエディングケーキの商品化をテーマにしたPBLである。同ホテルから提供された課題解決に向けて、授業にフィールドワーク、ホテルでの見学、ミーティング、提案書作成、プレゼンテーションなどを取り入れた。

- ・科目
ライフデザイン特論Ⅰ(2年生前期必修科目)
- ・実施期間/実施回数
2014年4月～8月/15回(週1回、1回あたり90分)
- ・受講生

ライフデザイン学科2年生、7名

- ・PBLのテーマ
理想のウエディングケーキの商品化
- ・提携先企業
京都の老舗ホテル

2. 分析方法

授業での学生への課題として、授業を通じて学んだことや授業の感想をレポートとしてまとめさせた。7名の記述内容をテキストデータとしてまとめ、授業で学生の学びを明らかにするために、計量テキスト分析を行った。テキストデータの表記のゆれは著者が一部編集をした。分析には、「KH Coder」(樋口, 2014)を使用した。「KH Coder」は、テキストデータを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである。このツールを活用し、以下の3つの手順で分析を進めた。

まず、テキストデータの語句を形態素に分け、品詞単位での頻出語を抽出する。次に、テキスト中の語句と語句の結びつきを可視化するため、共起関係図を作成する。共起とは、ある語が文中に表れた時にその文中に別の語が頻繁に出現するという関係のことを言い、語の出現パターンの似通ったものを線で結んだ図が共起関係図である。共起関係図は、布置された位置よりも、線で結ばれているか否かに意味がある(樋口, 2014)。その後、共起関係図で表示された語句が学生の文章ではどのように記述されているのか、もとの文脈を確認し、学生の学びの特徴や意識変容を検討する。

Ⅳ 結果と考察

形態素解析から抽出された分析対象語句の段落内の関連語の共起ネットワーク分析を行った結果を図1に示す。尚、今回は、「共起ネットワーク」の機能を使用し、名詞、サ変名詞、動詞、形容詞のうち、出現頻度が3回以上の出現回数の抽出語64語を対象とし共起関係図を作成した。

共起関係図と実際の学生の文脈を探った結果、本授業の学生の学びにおいて3つの特徴が見られた。1点目が、授業への肯定観・充実感・達成感の獲得である。「授業」「メンバー」「経験」が太い線で結ばれていることが分かる。これは、授業でのメンバーとの活動が学生生活や社会生活にポジティブな影響を与え、汎用

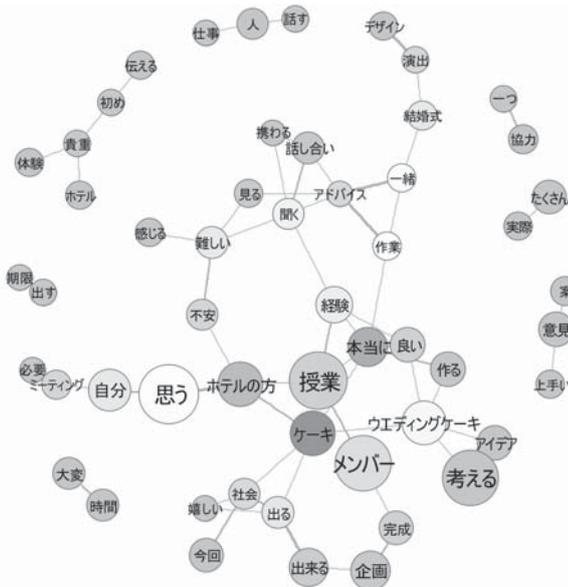


図1 共起関係図

的技能和態度・志向性を育成する要因となり得ることを示唆しており、授業での経験は、学生生活の充実感を高める効果があることが予測される。関連する学生の感想を一部、以下に示す。

- ① こういう経験は、自分の結婚式以外体験することができないので、メンバーと一緒に頑張ってきていい思い出ができたので良かったです。
- ② この経験を活かして、就職活動や、就職してからも、企画力や、メンバーで協力して一つのものを作り上げていくことの楽しさ等を生かしていきたいです。
- ③ この授業を履修して、とてもいい経験ができました。
- ④ 今回、この授業を履修して本当に良かったです。社会経験だけでなく、授業で話し合ったりするなかでメンバーとの仲も深まったり、今まであまり話すことの無かった人とも話すようになったり、出会いの場でもありました。

2点目が主体性、チームワーク、コミュニケーションスキルの獲得である。「アドバイス」「一緒」「作業」の結びつきから、学生が指導を受けるのではなく、「アドバイスを受けながら一緒に作業を進める」という主体的な態度でプロジェクトを進行していたことが分かる。また、コミュニケーションの中でも傾聴力の大切さを理解できたことがうかがえる。関連する学生の感想を一部、以下に示す。

- ① 共感・賛成する大切さを学ぶことができました。

ホテルの方も私達のアイディアに賛成していただき、アドバイスをしてくださったおかげで、デザインに沿った良いウエディングケーキが出来上がっていきました。

- ② ホテルの方はただの学生である私達の話をいつも真剣に聞いてくださり、そしてアドバイスをくださり、そして私達の無茶なお願いを聞いて試行錯誤し、ケーキを作ってくださいました。
- ③ ホテルの方には本当にお世話になり、毎日たくさん新郎新婦を見ているからこそ出来るアドバイスをたくさんもらうことが出来ました。
- ④ メンバーと一緒に最後までウエディングケーキプロジェクトをやり遂げることができ本当に良かったです。

3点目がキャリア意識の獲得である。「社会」「出る」「今回」「出来る」のつながりから、学生が「社会に出た時に今回の経験を活用することができる」と、学習の成果を実感していることがうかがえる。この授業は、キャリア教育としても有効に機能しうると考えられる。関連する学生の感想を一部、以下に示す。

- ① 固定概念に捉われずアイデアを考えられる発想力、そして相手側に自分達の思いや考えをいかに上手く伝えられるかという提案力が身についたのではないかと私自身思っています。これらは今後、社会に出てから必要な能力のはずです。
- ② 今回この授業では、学生の中に社会と触れ合うことが出来、この経験がこれからの就職活動、そして社会へ出てからも役立てる事が出来たらいいな、と思います。それに、これから先もしプライダ関係やホテル関係のお仕事に携わることがあれば、そのときは絶対今回の経験を生かしたいです。
- ③ 普段と違う事をいきなりしようとするとそれが正しいのかも分からなく、来年には社会に出るのだからもっと勉強しないといけないと感じました。
- ④ 一人欠けるとほかのメンバーに迷惑がかかるし、作業に遅れが出ることになります。これから社会に出ていくには自分勝手な行動を慎み協力的にならないといけないのだと実感しました。

以上の通り、学生自ら関係者の協力のもと、新たに得た知識を既存の知識と結びつけ、アイデアを考え提案するという活動に取り組み、それを通して学士力や社会人基礎力として提唱されているような汎用的能

力をも身に付けたという学びの特徴や意識の変容が見られる。

V まとめ

本報告では、PBL型授業において、学生のレポート課題と授業の感想から計量テキスト分析の手法により、共起ネットワーク分析により解析した。これにより、PBL型授業での学生の学びや意識の変容を特徴付けることができた。PBL型授業において、学生の学びを測定するにあたり、テキスト分析が一つのツールとして活用できる可能性が明らかとなった。

また、PBL型授業における学生の学びの特徴として、学生自身が、汎用的技能、創造的思考力、チームワーク、就業力などの獲得感を高めていることが明らかになった。しかし、本報告では著者の短期大学部の学生を対象としたブライダル科目でのPBL型授業における学生のレポート課題と授業の感想をテキスト分析した結果であり、単一事例から得られたものである。そのため、他のPBL型授業に適用できるかは判断できない。そのため、今回の結果が実態を反映しているかどうか、さまざまなPBL型授業での学生のテキストデータを分析し、その結果と比較し、妥当性を検討する必要がある。さらに、学生の学びを可視化と評価方法に関する考察が不足している。その点についてはより深く研究する必要がある。

注

- 1) 学士力とは、4分野（知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、総合的な学習経験と創造的思考力）とそれらに関わる13項目（異文化・多文化の理解、人類の文化・社会と自然に関する理解、コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力、自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理感、市民としての社会的責任、生涯学習力、知識の総合的活用と課題解決能力）のことである（中央教育審議会,2008）。
- 2) 社会人基礎力とは、2006年に経済産業省が提唱した3つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働くチカラ）12の能力要素（主体性、

働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）のことである。詳細は、<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> を参照（最終アクセス日2014年9月18日）。

- 3) 就業力とは、2010年2月に改正された大学設置基準並びに短期大学設置基準において「学生が卒業後自らの素質を向上させ、社会的・職業的自立を図るために必要な能力」と定義された。

参考文献

- 中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて（答申）』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
- 中央教育審議会（2012）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 河合塾（2011）『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか—経済系・工学系の全国大学調査からみえてきたこと』東信堂
- 河合塾（2013）『「深い学び」につながるアクティブラーニング—全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』東信堂
- 河合塾（2014）『「学び」の質を保証するアクティブラーニング—3年間の全国大学調査から』東信堂
- 小山理子（2012）「短期大学におけるブライダル教育手法の一考察—PBLを適用した実践型教育の提案—」, 京都光華女子大学短期大学部研究紀要第50集
- 小山理子（2013）「短期大学におけるブライダル教育手法の一考察—PBLを適用した実践型教育の実践報告—」, 京都光華女子大学短期大学部研究紀要第51集
- 中山留美子（2013）「アクティブ・ラーナーを育てる能動的学修の推進におけるPBL教育の意義と導入の工夫」21世紀教育フォーラム第8号
- 中尾 憲司・足立 晋平・松尾 智晶・木原 麻子（2014）「人事実務家教員による京都産業大学PBLの実践報告」, 高等教育フォーラム第4号

吉田香奈、小澤孝一郎、於保幸正、古澤修一、西堀正英、田地豪 (2013)

「学生の主体的学びの確立に向けた授業方法の改善—教養ゼミへのPBLの導入—」, 京都大学高等教育研究第19号

松下佳代 (2010). 『<新しい能力>は教育を変えるか-学力・リテラシー・コンピテンシー』 ミネルヴァ書房

松下佳代 (2014). 「大学から仕事へのトランジションにおける〈新しい能力〉—その意味の相対化—」 溝上慎一・松下佳代 (編) 『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育』 ナカニシヤ出版

溝上慎一 (2011). 「アクティブラーニングからの総合的展開-学士課程教育 (アクション・ラーニング) についての方法的考察業・カリキュラム・質保証・FD), キャリア教育, 学生の学びと成長」 河合塾 (編) 『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか-経済系・工学系の全国大学生調査からみえてきたこと』

樋口耕一 (2014) 『KH Coder 2x リファレンス・マニュアル』

<http://khc.sourceforge.net> (2014年8月参照)

広島大学人材育成推進室 (2012) 『PBL 体験プログラム 学習者ガイド』

三重大学高等教育創造開発センター (2007) 『三重大学版 PBL 実践マニュアル -事例シナリオを用いたPBLの実践-』

<http://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/PBLmanual.pdf>

三重大学高等教育創造開発センター (2011) 『三重大学版 Problem-based Learning の手引き—多様なPBLの展開—』

茨木大学大学教育センター (2013) 『茨城大学 根力育成プログラム PBLハンドブック—学生の主体的な学びの実現をめざして—』